九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[04_1] 図書館情報 : 九州大学附属図書館月報 : 4(1)

https://doi.org/10.15017/16161

出版情報：図書館情報. 4 (1), pp.1-4, 1968-01-25. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

九州大学附属図書館月報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin Vol. 4, No. 1 Jan. 1968

就任のごあいさつ

伊藤 不二男

私はこんど九州大学附属図書館長に就任いたしました。歴代の図書館長はみんな有能な方々ばかりでありましたのに，こんど私のような経験も能力もないものが図書館長になって，よくその重責をはたせるかどうか，心配であります。

図書館の仕事は地味ではありますが，大学の学問・研究・教育の基礎であり，したがって，いうまでもなく大学でもいちばんたいせつな基本の仕事であります。それだけにやりがいのある仕事といわなければなりません。ですから私もまた歴代の図書館長にならい，私なりに最善の努力をつくさねばならないと思います。

それにしても現在の九州大学の図書館は，たくさんの困難な問題をかかえております。図書館の近代化ということが叫ばれますが，いまのわれわれの図書館はその標準からははるかにかけはなれたものというほかはありません。施設や設備の点はもちろんのこと，図書館職員の数も昭和四年当時のままで，いちじるしく不足しております。そのために，毎年おびただしく増加する図書を整理するため，どうしても多数の非常勤職員のたすけをかりなければならない実情であります。これは図書館の正常な姿とはいえません。

そのほか，こうした図書館の直面する問題をいちいち数えあげるときりがありません。しかもそのどれをとってみてもみんな非常にむずかしいことばかりで，そう容易に解決できる見込みがあるとはとても考えられません。しかしそれでも，私もやはり，これまでの代々の図書館長の意志をひきついで，そうした問題の解決のため懸命の努力をつくし，図書館の改善と発展，その近代化のためにはげまなければならないと思います。しかしそのためには，なによりも九州大学全体のご理解とご協力が必要であります。どうかよろしくお願いいたします。

就任にあたり，謹んでごあいさつをいたします。

―― 伊藤館長のおもな略歴 ――

伊藤館長は，明治44年福岡県の生れ，昭和11年東京帝国大学法学部法律学科，同12年政治学科をご卒業，九州法学校講師を振り出しに，同15年10月，九州帝国大学（法文学部）助手，同25年3月，熊本大学（法文学部）助教授を経て，同29年2月に九州大学（法学部）教授に任ぜられた。昭和37年法学博士，同41年5月には,「ビトリアの国際法理論」により，学者にとって最高の栄誉である日本学士院賞を受賞されている。

一方，行政面では，学生部長（昭和37年10月～同38年6月),法学部長（昭和38年7月～同40年6月）の役職を歴任され，また，評議員をはじめ，附属図書館商議委員（2期）のほか，各種の委員，学生部参与等の要職を歴任されている。

学術情報懇談会を開催

＜とき：昭和42年12月15日　ところ：九州大学本部第一会議室＞　さる9月12日から22日の間，日本学術会議主催で東京で開かれた FID（国際ドキュメンテーション連盟）第33回会議について，その意義と成果の普及を目的として，九州大学附属図書館主催，社団法人日本ドキュメンテーション協会後援で九州地区の関係者を対象に開催された。この懇談会の講演者として，日本ドキュメンテーション協会会長大塚明郎氏の来学をこい，同氏から FID 会議の日本開催の意義，会議の概要および今後のわが国における情報政策・ドキュメンテーション対策の重要性などについて約2時間にわたり講演があり，来聴者との間で懇談が行なわれた。

◆ 研　修

福岡県大学図書館協議会福岡地区研究会（第3回）

＜とき：昭和42年12月11日　ところ：九州産業大学＞

11館17名の参加のもとに，約3時間にわたり，当日の研究テーマである「教官に対する図書館奉仕」について互いに検討した。はじめに九州大学中央図書館から,「教官への図書館奉仕」の館種別・機能別態様と，その基本的意味について総論的な研究発表を行ない，続いて各館から，現在および将来の改善方向と当面の問題点について紹介があり，意見交換と質疑応答が行なわれたが，各館とも相互に改善の必要性を確認して散会した。

学内図書館のたより

図書選択方法を検討　　―― 中央図書館 ――

中央図書館では，さきに商議委員会でみとめられた「九州大学の中央図書館における図書選択方針」にもとづき，図書館長を中心に図書選択の具体的方法について検討を重ねてきたが，このほどその方針が固まり，実施の段階となったので，ここでその方法を簡単に報告することにしたい。

その目的はいうまでもなく，総合大学の中央図書館としての，図書資料の計画的な選択収集である。今回は，国内出版物に限った。

まず，国内の約4000にのぼる出版社より，大学図書館として選書の対象となりうる 500社を選び，出版案内の継続送付を依頼するとともに，読書新聞・各種新聞紙上の出版案内，そのほか日本図書館協会選定図書週報などの切り抜きを行ない，それらの資料を出版社別に整理することにした。これで国内のおもな新刊図書の出版案内はほぼ網羅(ら)できる体制が確立した。だが，これらの膨大な資料を図書館長・部課長ら中央図書館の数名の選書委員が全部眼をとおすことは，日常業務の合間ではとうてい不可能である。そこでその選書の第一段階として，国会図書館から毎週発行されている納本週報（国会図書館が毎週受け入れた図書の目録）に選書委員が眼を通し，各自の自由な考えで，現在中央図書館に必要と判断される図書をチェックすることにした。次に，先に収集整理した出版案内等のなかから，チェックされた図書に関する資料を抜き出して，その内容紹介をよく検討し，選書委員合議のうえで購入図書を厳選することにした。

国会図書館の納本週報は，国内出版物が全部網羅されているわけではないが，速報性をかねた内容豊富な図書目録としては，まずこれをおいて外にはない。なおこのほかに，投書による学生の希望図書，および利用状況などの調書もその都度参考にしていくことにしている。

資料紹介

附属図書館所蔵「萩野文庫」について

川　添　昭　二

現在，附属図書館に所蔵する「萩野文庫」は，昭和4年に故東大国史学教授萩野由之氏の旧蔵書を購入して受け入れたものである。代価は約12,000円，冊数は約7,500。萩野氏は万延元年(1860年)佐渡相川町に生まれ，明治15年東大文学部附属の古典講習科に学び，卒業後は元老院，貴族院に勤務し，学習院に奉職。29年に高等師範学校教授兼女子高等師範学校教授。34年4月に文学博士。同年9月東大の教授に任ぜられた。大正12年東大を退官し名誉教授となり，翌13年（1924年）2月2日，65歳をもって逝去された。

「萩野文庫」は萩野氏の研究関心を主軸として収集されているものであるから，萩野氏の研究業績を通観すれば，おのずから文庫の性格の大要もうかがわれる。萩野氏の著書は非常に多く，なかでも『日本歴史評林』(明治26年)，『大日本通史』(明治32年)，『日本史講話』(大正9年)，『王政復古の歴史』(大正7年）などはその主著である。また『日本制度通』(明治22—33年）は小中村義象との合著。『日本古代法典』(明治25年)は小中村義象・増田干信との共編。『徳川慶喜公伝』8冊（大正7年）はその監修にかかるもの。さらに，小中村義象・落合直文とともに明治23年から25年にかけて，日本古典38種を収めた『日本文学全書』を刊行しており，個人としての国文学書の校訂本もかなりある。西洋文明の輸入に急であった当時，困難を克服して日本の古典を集成し，国史国文への関心を喚起した功績は大きい。

萩野文庫所蔵本中，萩野氏自身の書写本，校合本，書入本，稿本は主として国史学関係のものである。署名のある写本として，「改号新抄」・「学庸欄外書」(安井息軒著)・「沙汰未練書」(合綴,「式目聞書」)・「天書」などがあり，「吾妻鏡」・「拾芥抄」・「読史余論」(享保9，6冊）などは書入本である。明治21年，栗田寛が「室町幕府職官考」編纂のとき，内閣文庫本の「後鑑」を借りているが，萩野氏もこれに関係し，自筆抄録本3冊を草している。自筆本「先賢尺牘」は江戸時代の諸学者の手紙を集めたものである。自筆稿本「記録異同考」・「記録便覧」などは日本古記録の資料として使用にたえるものであろう。校合本「公事根源集釈」(松下見林撰，元禄7年）などは，制度史の草分けとしての氏の研究関心の在り様を伝える。このほか，同文庫中には江戸時代の制度史関係の写本類がかなり多い。

萩野文庫の全貌は，昭和7年1月九大附属図書館で作成された「萩野文庫目録」(五十音順，プリント版，A5，213頁）によって通観できる。同文庫の特色は，国史学・国文学勃興期を推進した学者の集書にふさわしく，両学に関するものを中心とし，中国学に関するものなどを収めているが，国史学では法史・制度史関係のものに特色があり，国文学では未公刊の江戸期の作品をかなり含んでいる。集書の系路を示すものと思われるが，本文庫には江戸時代の国学者小野高潔の自筆本が多く，一つの特色をなしている(中村幸彦教授の御教示による)。高潔は高尚の子，幕府の小普請方を勤めた。「好ンデ本朝ノ文物制度ヲ研讃シ著書尠カラサレトモ惜哉杜撰ノ誹ヲ免レズ」(『国学者伝記集成』続）といわれているが，江戸時代の国学や萩野氏の学風形成を知るのには重要な資料となろう。ちなみに，小野高潔の著作のうち,「屋気野随筆」が『日本随筆大成』4に入っている。

本文庫中，貴重書として別置されているものについて述べておこう。貴重書も，おおまかに

国史・国文・その他と3類に分けられる。国史のうち，まず制度史関係のものとして，清水浜臣書入れの「倭名類聚鈔」・青木敦書の「郡名考」（和学講談所本）などがある。栗田寛の「上古職官考」(上・中・下，3冊)・「中古職官考」(4冊)・「室町職官志稿」・「室町職官考」(7冊)は萩野氏の写本。内藤耻叟の写本「有職備考」(延享改元甲子中元日，藤崎正方編，4冊）もある。柴野栗山と立原翠軒の書簡を収めた山内香雪自筆本「柴立手翰」(乾坤2冊，天保5年甲午冬十一月七日夜燈下書了)・猪飼敬所筆の「南朝紹運図」（続神皇正統記，同弁紀，同改正を合綴，最奥に寛政6年11月)・屋代弘賢筆の「古今要覧稿」金玉部・文化9年9月平田篤胤本を堤朝風が転写した伴信友の「占方問答」・文久2年内藤直が写した「冠位通考」などは 筆写者の故にも貴重である。嘉永6年薩摩の樺山資雄が書いた「笠狭(かさ さ)考」は南九州の郷土資料としても使える。樺山は歌を香川景樹に学び『薩隅日地理纂考』の著者として有名。歴史文学関係としては，①「後三年記」・②「大鏡」(上・中・下3冊)・③「水鏡」がある。①は新井白石本をもとにして校合した伊勢貞丈本の転写本で，寛政12年8月21日赤穂侯御本をもって校合した旨の松岡辰方の奥書がある。②・③は同筆で江戸中期ごろの写本。②は大慈光院本系で「大鏡」の本文研究には不可欠のもの。平田俊春氏が「萩野本とその系統本」(『日本古典の成立の研究』)で詳論し，学界に著聞。山岸徳平氏，秋葉安太郎氏等にも萩野本についての論がある。③は永正9年の次の奥書をもつ，いわゆる大慈光寺本である。

本云 此水鏡申請大慈光院南御所御本妙善院殿（善カ）御物也，借卿掌侍故中納言基綱卿女，筆令書写，可秘蔵之，

永正第九後四月十六日　古槐散木判

すなわちこの系統の本は，足利義政の室日野富子（妙善院）の遺本で，後柏原天皇の皇女大慈光院（覚有尼）に伝えられたものである。

文学関係としては，元和年間刊行の活字本「うつぼものがたり」(俊蔭巻,上・下2冊）がある。「中務内侍乃日記」は橘千蔭の自筆写本。「宝物集」は2巻本系統としては古い方に属するもので，中世末・近世初頭の古写本。「本ノ希ナル上ニ物徂徠ノ評語アルハ殊ニ珍トスベシ」と表書された「搏桑名賢文集」(元禄11，林九成編，5巻）は，江戸前半期の諸学者の文集。冷泉為村の門下で博学多才，和歌に関する著書の多い石野広道の自筆本「感応抄」(上・下2冊，寛政6年）は寛政期歌壇史の一資料であろう。

その他，跡部良顕筆の「儒学教伝光海筆録上」(享保9)，「神道教伝光海筆録下」(享保9）は，垂加神道関係の著作である。以上，本文庫の内容を述べてきたが，ほんの概要にすぎない。国文学関係著作の調査はかなり進んでおり，関係者によって利用もされているが，史学関係からの調査は未だしの感がある。彰考館本の写本もかなりあり，国制史研究の資料としても，もっと利用されて然るべき文庫である。本文庫には「阿波国文庫」・「不忍文庫」その他の印記をもつものもかなりある。それらを含めた詳細な報告は後日を期したい。

（かわぞえ・しょうじ：文学部講師，五十年史編集室）

○○ あとがき ○○

□くすんだ緑色のドーム，さびた雨樋，にぶく光っている窓々，壁には枯れツタがところどころ這っていかにも古いこの建物が，九州大学附属図書館の外観です。これを評して，ある人は，「アカデミックな雰囲気で好きだ。」といい，ある人は，「オンボロ。」と一言にかたづけます。なるほど，できたばかりの楚々とした白っぽい壁よりは，黒ずんでいる方が伝統的で何だか親近感がわきます。けれども，たとえば書庫など，「これが，保存図書館だ。」とでもいうように，新刊本をあまりみかけません。「ボロ。」といわれて返す言葉がないようですが，「便利になりましたね。」と，よく利用される方も多々あります。

□「図書館の近代化。」と，近年来叫ばれて久しいようですが，研究と学習，集中と分散，保存と利用など，図書館のもつ二面性のどこにかねあいをもっていくのか，大変むずかしい問題だと思います。 それ以上に，一人前に書を司どることは，なかなか容易でないと，自覚と責任を感ぜずにはいられません。

九州大学附属図書館月報「図書館情報」Vol. 4, No. 1（通巻29号）
1968年1月25日発行・発行人　船越　惣兵衛
発行所　九州大学附属図書館・福岡市大字箱崎3576・電話代表㊹1101　内線5301